



松村昌家 (著)

『ヴィクトリア朝文化の世代風景
—ディケンズからの展望—』

Masaie MATSUMURA,

The Landscape of Victorian Culture

(343 頁, 英宝社, 2012 年 2 月 15 日,

本体価格 3,800 円)

ISBN: 9784269721173

(評) 楚輪松人

Matsuto SOWA

はじめに

本書は、2012 年 2 月 7 日、Charles John Huffam Dickens (1812. 2. 7-1870. 6. 9) の生誕 200 年記念日に合わせて刊行された。僥倖、慶賀の至りである。著者は、日本におけるディケンズ研究の牽引車、松村昌家氏。これまで同氏の著作が日本のヴィクトリア朝英文学研究にもたらした裨益は測り知れない。本書は、3 部構成、全 12 章からなる。その内訳は、作品論が 6 編：『ドンビー父子』(第 1 章), 『リチャード・フェヴァレルの試練』(第 2 章), 『トルコ物語』(第 5 章), 『メアリ・バートン』(第 6 章), 『パンチ』(第 9 章), 『カスターブリッジの町長』(第 10 章), 作家論が 3 編：「アンデルセン」(第 3 章), 「W. P. フリス」(第 8 章), 「ワイルド」(第 12 章), そして事物論が 3 編：「パブリック・スクール」(第 4 章), 「マンチェスター美術名宝博覧会」(第 7 章), 「イースト・エンド」(第 11 章) である。本の帯に「文学は文化の花なり」と謳われているように、Dickens を中軸にして、ヴィクトリア朝時代の文化と文学についての展望がなされている。事実、本の帯の言葉が本書のすべてを物語る。全文を引用しよう。「文学は文化の花なり、という考え方に立つ著者がディケンズを中軸にして、ヴィクトリア朝の文化と文学との相関性の諸相を展望。一見異質の作家たちの間にも意外な脈絡があることを解き明かす。」この文章を手掛かりに本書の書評、すなわち内容紹介と批評をして行こう。

1. 世代風景を展望するために

本書の日本語タイトルは「ヴィクトリア朝文化の世代風景」、英文タイトルは *The Landscape of Victorian Culture* である。著者が読者に提供するものはヴィクトリア朝文化の一望千里のパノラマ風景である。松村氏は「諸相」を展望する。「諸相」と言えば、E. M. Forster の 1927 年の *Aspects of the Novel* 『小説の諸相』、あるいは Noam Chomsky の 1965 年の *Aspects of the Theory of Syntax* 『文法理論の諸相』などが思い出される。まさしく本書は、出るべくして出た、ヴィクトリア朝文化の「諸相」についての研究である。Dickens が、*A Christmas Carol* (1843) や *The Chimes* (1844) において、「ひと晩の夢の中に、人間の一生ばかりでなく、イギリス社会の状況をパノラミックに描き出してみせた」(137 頁) ように、松村氏はこの一冊のなかに、Dickens ばかりか、ヴィクトリア朝文化の「時代的、社会的コンテクスト」(282 頁) を映し出す。具体的には、時代の文学作品をそのコンテクストのなかに位置づけて読み直そうとする。そうすることにより、時代が作家たちに影響を与えた部分、彼らを作った部分が見えてくるわけである。

また、松村氏は「解き明かす」。「W. P. フリスとディケンズ」(第 8 章) を論じて、絵画と文学との「交渉」(202 頁) を論じ、その相互作用を表現して、松村氏は「相互照明」(230 頁) と言う。英語で言えば、“mutual illumination” ということになる。この活字と挿絵の「相互照明」こそ、Dickens 作品を理解する鍵である。[言わば、“Dickensian Negotiations”.] なぜなら、これまでの松村氏の数々の研究—『ヴィクトリア朝の文学と絵画』(1993) や『「パンチ」素描集』(1994) など、活字とイラストレーション(挿絵/照明)の研究—が明らかにしたように、2 つの媒体について「解き明かす」ことこそ、「ヴィクトリア朝の文化と文学」を読み解く方法だからである。事実、ヴィクトリア朝文化とは視覚的想像力の勝利に他ならない。2 つの媒体の比較研究こそ、ヴィクトリア朝文化研究の王道である。その点に付いては、詩人の Edith Sitwell を姉に、評伝 *Dickens* (1932) の著者 Osbert Sitwell を兄に持つ、Sitwell 三姉弟の末弟、美術評論家 Sacheverell Sitwell が、「イギリスの絵画のインスピレーションの根源は、常に文学にあった」(190 頁) と、いみじくも指摘しているとおりでである。そして、「一見異質の作家たちの間にも意外な脈絡があること」の解き明かしとして、松村氏は、本書の最後の 2 つの章で、ロンドンを流れる大動脈、テムズ川を下ってイースト・エンドに向かい、さらにその思いは遙か「オーストラリアのヴァンディーメンズ・ランド(今のタスマニア)」(318 頁) にまで及ぶのである。

2. 文化と文学との相関性

松村氏は、これまで絶えず「文化と文学との相関性」を問題にしてきた。今から10年前の『英語青年』に寄稿したエッセイ、「ヴィクトリア朝文化研究の半世紀」(2002年3月号)での松村氏の言葉を引用しよう。曰く。「作品も一つの生命体である以上、それが生まれ育ったあらゆる環境を考慮せずには、その本質を読みとることはできない」(753頁)。松村氏はテキストを歴史のなかに置く。作品や作者だけでなく、その時代や社会に光をあてる。なぜなら、テキストだけがそこに存在するということはあり得ず、いつの時代に、どのように書かれ、どのように読まれたのか、ということを理解することが大事だからである。作者の文化的背景、作品の歴史のなかでの立ち位置を読者に知らせ、その読書の参考に供するという役割が英文学研究者としての松村氏の使命なのである。

しかし、ヴィクトリア朝を一つのテキストとして理解するには、経済学、歴史学、社会学、思想史などについての詳細で深い知識、例えば、産業主義、政治経済学と統計、功利主義、教育、宗教、革命、牢獄、作家の役割、著作権の問題などについての知識が必要となる。その他にも「イギリス初の美術の祭典」(第7章)から、「パンチとジュディ、あやつり人形芝居、動物の見世物、エチオピア(顔を黒く塗った歌の芸人グループ)」(220頁)などの大衆演芸、果てはイースト・エンドの「アヘン窟」(第11~12章)や「男色者(ペドラスト)が好む少年」(321頁)に至るまでの該博な知識が要求されるだろう。そんなことができるのはスーパーマンである。

本書の特徴として、その至る所に、絵入り週刊誌『パンチ』が遍在する。事実、『パンチ』が読める松村氏はスーパーマンでなくて何であろうか。『パンチ』は研究材料の宝庫である、といくら言われても、サブテキストとして、例えばDickensの小説が読み込まれたテキストならば何とかなるだろう。しかし、『パンチ』の他の頁となると、まったく歯が立たない。すべてテキストは「間テキスト性」の産物であるとは言え、この諷刺週刊誌ほどハードルの高いテキストはない。一般的に、諷刺文学は短命である。話題性、時事性、つまりコンテキストに強く依存する様式だからである。それが書かれた当時の世相や前後の時代背景などの具体的な事情を踏まえなければ、『パンチ』の正しい理解など不可能である。ヴィクトリア朝の最強の諷刺文学である『パンチ』は、後世の読者には最大級に理解しにくい宿命を担っている。今一度言おう。『パンチ』が読める松村氏はスーパーマンなのである。

3. ザ・ディケンジアン

松村氏は「文学は文化の花なり」という立場に立つ。そして本書から敷衍されるのは「ディケンズは文学の花なり」ということであろう。松村氏は、日本を代表する、しかも定冠詞の「ザ」が付く「ザ・ディケンジアン」である。本書が Dickens の『ドンビー父子』の考察で始まることには意義がある。この小説は松村氏にとって大事な作品である。かつて『英語文学世界』（英潮社、1976年10月号）が、宮崎孝一氏、川本静子氏、そして松村氏の3氏の論文を揃えて、Dickens を特集したことがあった。論文「ミスター・ドンビーの父親像」で、Mr. Dombey の登場を「イギリスの小説史上における最初の新型の人間」（41頁）と紹介した松村氏こそ、新しい Dickens 研究者の登場であった。その頃から Dickens を読み始めた筆者は、大学院の集中講義で、小池滋氏からは John Butt and Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* (1957) 及び *The Clarendon Dickens* の意義について、続いて松村氏からは Humphry House, *The Dickens World* (2nd ed, 1960) の研究について、薫陶を受けた。松村氏の「学際的研究法」を通して、若きディケンジアンたちは、広い視野を持ち、Dickens の全人格、そのユーモアとペーソスの要素は無論のこと、その人間的な要素も一望の下に収めて、“DICKENS”と呼ばれている、あの大きな感情の総体をしっかりと把握することを教えられたのである。

Dickens 没後 100 年の 1970 年から、生誕 200 年の 2012 年までの 42 年間、ヴィクトリア朝文化に対する見方は大きく変容した。その一つの要因は、本書でも幾度となく言及されている、Dickens の同時代人、Henry Mayhew (1812. 11. 25-1887. 7. 25) の再発見によるものである。松村氏が新野緑氏と共同で、その代表的な記事 6 編を編訳し、『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』（2009）と題して刊行した Mayhew の *The Morning Chronicle* 通信、*London Labour and the London Poor* (1861-62) を抜きにしては、もはやヴィクトリア朝の文学も社会も語ることはできない。原英一氏の言葉を借りれば、それは「巨大化し繁榮する大英帝国のメトロポリスに蠢いていた夥しい労働者と貧民そして犯罪者たちの希望と絶望、搾取と荒廃、人間性と非人間性の混交、横溢する活力と救いようのない悲惨とをあますところなく描き出したこの膨大な記録」は、確かに「失われた民衆文化の記録」（『英語青年』1989年4月号2頁）である。わが国でこの歴史的・文学的モニュメントの研究に先鞭をつけたのが松村氏であったことは言うまでもない。

さらにもう一つ、この 42 年の間に Dickens 研究のあり方を決定づけたのが *The Pilgrim Edition* の書簡集である。1950 年代、決定版の Dickens 書簡集を目指して、前述の Humphry House によって着手され、1965 年の第 1 巻から始まって、

2002年に刊行を終えた *The British Academy/ The Pilgrim Edition of The Letters of Charles Dickens*, この全12巻、総計14,252通からなる書簡集の脚注に施された詳註こそ、ヴィクトリア朝文化研究の金字塔であり、すべての社会学者、歴史学者、経済学者、文学研究者がこぞって参照すべき第一次テキストである。そして、わが国で同種の営為に従事してきたのが *Humphry House* に強く影響を受けた「ザ・ディケンジアン」、松村昌家氏に他ならない。以前、松村氏は、Dickensの「新発見の書簡」の意義を考察して、次のように言った。「新発見のDickensの書簡は、どんなものでもそれなりの価値を有する。それは、とりもなおさず、彼の伝記に関する新事実や追加を意味するものであり、従って、Dickensの人間性や作家としての特質の理解に、貴重な手がかりとなりうるであろうからである」(『英語青年』1974年10月号334頁)。本書の第3章「ディケンズとアンデルセン」は、書簡を通してみた2人の作家の人間像の考察であるが、このような研究こそ、これからの研究者が見習うべきアプローチであろう。

むすびに

現在、Dickens研究の新時代が始まろうとしている。Dickens生誕200周年を記念して、2012年8月、Catherine Waters編集の *A Library of Essays on Charles Dickens*, 6 Vols. (Ashgate, 2012) が刊行された。ここに寄稿された論文の数々を見ても、実に多様なDickens研究の側面、一ヴィクトリア朝の印刷文化(第1巻)、都市(第2巻)、翻案(第3巻)、子ども時代(第4巻)、セクシュアリティとジェンダー(第5巻)、世界に広がるDickens(第6巻)―が、現代的アプローチによって探究されている。第6巻のGlobal Dickensには松村氏の“Dickens in Japan”が収録されている。[かつて松村氏は、『英語研究』(研究社)が、Dickens生誕100周年記念事業として、*Charles Dickens Special Number* と題して、『ディケンズ没後百年記念臨時増刊号』(1970年6月1日一斉発売、総104頁、280円)を刊行したとき、「ディケンズと日本」(70-71頁)を寄稿している。]これら多くの異なった角度からDickensという人間とその作品を論じた文章を全6巻に集めることは、この作家の複雑さ、多面性、深さ、広がりなどを読者に考えさせる上で有益なことである。しかし、論文集が与える豊かさとは別の次元の豊かさ、すなわち一人の著者による単著ならではの醍醐味というものを、松村氏の『ヴィクトリア朝文化の世代風景―ディケンズからの展望―』は感じさせる。それは、Dickensの月刊分冊のように、部分と部分との有機的な関係、一見異質なものの間に存在する脈絡が生み出す、あの全体としての豊かさである。まさしく“ヴィクトリア朝文化”としてわれわれが知る、あのおおきな感情の総体をしっかりと把握すること

を本書は可能ならしめる。

しかし、筆者はある種の物欲しさを感じないわけではない。Dickens の社会意識、その他に関する考察、つまりテキストのコンテクストとは別に、作品自体の面白さの秘密の解き明かしをしてほしかった。Dickens の不思議は、生誕 200 年後の今もなお読まれているということである。だから何よりもその不思議について知りたい。何より彼の想像力である。Dickens の作品は、時代を映し出す鏡であると同時に、〈時〉を超越する力、時代を先取りをする驚くほどの先見性を備えている。果たして現代の研究者は、次から次へと流行し消えて行く種々雑多な文学理論、日進月歩で推移するアプローチを追い回すのではなく、George Gissing や G. K. Chesterton などの伝統的な方法へ回帰すべきなのか。本書の第 11 章に引用されている Gissing の言葉は特筆に値する。Trollope は Dickens より忠実に人生を模写する、と述べた後、Gissing は言う。「しかし、彼の人物は、ディケンズの人物ほど永く生き抜く力をもたない。ディケンズは、実際に創造した。—即座に、そして永遠に彼らの時代の表象となるようなさまざまな個性を創造したのである」(295 頁)。作品の生まれた時代を超えて生き続ける Dickens の人物たちについての Gissing ならではの直観的な指摘である。原書を引用しよう。“But his [=Trollope’s] figures do not survive as those of Dickens, who did in fact create—created individuals, to become at once and for ever representative of their time.” (*Charles Dickens: A Critical Study*, 1899, Ch. 4)。時代の表象でありながら、時代を超えて生き続ける Dickens の人物たちの生命力。この生命力の正体は何か。換言すれば、なぜ Dickens の文学は、〈時〉の試練に耐えて生き延びる古典たり得るのか。作品が、「一つの生命体」であり、読者に新しい命を吹き込むものならば、作品に永遠性を付与しているものは何か。本書を読了後、筆者の脳裏に去来したのは、Dickens の未来について述べた、Chesterton の以下の言葉の意味する所であった。“The positive argument for the permanence of Dickens comes back to the thing that can only be stated and cannot be discussed: creation.” (*Charles Dickens*, 1906, Ch. 12)